

# ヒューマンライブラリーに学生司書として関わった学生の 自己教育力の変化に及ぼす要因の検討

岩 森 三千代・関 久美子

## Examination of Factors Affecting the Change in Self-Education Ability of Students Involved in Human Library as Student Librarians

Michiyo Iwamori・Kumiko Seki

### 1. 目 的

ヒューマンライブラリーとは、障害のある人や社会的に偏見を受けやすくその集団が少数である人々、いわゆるマイノリティを抱える人々を、図書館の本に見立て、一般の人々に貸し出す感覚で対話してもらうことにより、多文化社会の偏見や差別を軽減していこうとする試みである。2000年にデンマークで始まり、現在世界90カ国に広がっている。日本においても大学や市民団体、個人によって各地で開催されている。ヒューマンライブラリーの効果として読者のもつ偏見を低減させる他、本にとっては自己を語ることによって自身と勇気をもつ機会となり、自己を構成し、態度変容を生み出す効果があるといわれている。大学においてはゼミ活動として取り入れることで、運営を通して関わった学生の内面的成長についても報告されている<sup>1)</sup>。新潟青陵短期大学では、2018年にヒューマンライブラリーを実施し、17名の学生が学生司書として関わった。

学生の内面的成長を表す指標として自己教育力がある。自己教育力とは、自ら学ぶ力、学習意欲を持ち続けるために必要な自律、自主的、自己管理能力であるといわれる。自己教育性に必須なものとして、Ⅰ成長・発達への志向、Ⅱ自己の対象化と統制、Ⅲ学習の技能と基盤、Ⅳ自信・プライド・安定性という4領域が挙げられる<sup>2)</sup>。坪井はヒューマンライブラリーの実践の中で、学生集団は自己教育力、社会人基礎力、就業力等をアップさせる潜在的機能をもっていると述べているが、実際に指標を用いて計測し量的研究としてまとめた研究は過去にあまりない<sup>3)</sup>。本研究では、学生が司書としてヒューマンライブラリーを運営する中での教育効果と梶田の指標を用いた自己教育力の変化との関連を明らかにすることを目的とする。

## 2、ヒューマンライブラリーとは

既述したようにヒューマンライブラリーは2000年にデンマークで始まった、人を「本」に見立てて「読者」に貸し出す図書館である。障害や人種的マイノリティといった属性のために、周囲から近づくににくいと思われたり、偏見の対象となったりする人が「本」となりイベントの来場者である「読者」に貸し出される。そこで、「本」と「読者」が1対1ないしは1対少人数で30分程度の対話を行い、「読者」が「本」の語りに耳を傾ける（横田2012, p.155）。多様な他者との直接的な対話を通して、心のバリアを溶かし、多様性に寛容な心を育てる取組として各地で開催されている（坪井 2017, p.65）。

ヒューマンライブラリーは図書館仕様の仮想的空間であり、そこには様々な属性を持つ「本」が用意されており、その図書館を運営するのが「司書」（スタッフ）である。その図書館に「読者」（参加者）が足を運び、「本」を読む（対話する）。「読者」はまず会場で「同意書」にサインをして読書カードを取得する。「同意書」には、イベントの趣旨を理解し「本」を故意に傷つけないことや、「本」のプライバシーに関わる情報を漏洩しないといった事項が書かれており、それらを厳守することがヒューマンライブラリー参加への条件となる。読書カードを取得すると、会場に掲示してある「本」の「あらすじ」を読み、自分の興味のある「本」を選択し、受付でその「本」を借りる手続きを行う。その後、指定された時間に所定のテーブルにつき、生きた「本」と30分間の対話を行う。「読者」の「本」の属性に対する予備知識は不要であり、誰でも気軽に参加できるイベントとなっている。

2018年に青陵大学・短期大学部で行われた「あなたを知って私を知りたい～ヒューマンライブラリー@SEIRYO」では19冊20名の方々が「本」として参加した。「本」の属性は中途視覚障害、障害を持ったお子さんの親、適応障害、うつ病、新潟水俣病支援者、白血病患者遺族、骨髄ドナー、引きこもり、若者支援、元ホームレス、ホームレス支援者、自殺未遂、アルコール依存症、障害者の性介助である。「本」一人に対して「読者」は多くて6名までとし、30分の対話を1セッションとし各セッションの合間に15分の休憩を入れ、合計で7セッションを行った。

## 3、ヒューマンライブラリー学生司書プロジェクトとしての活動内容

日本で開催されるヒューマンライブラリーは大学で開催されることも多く、その場合はその大学のゼミ単位で、または有志学生が「学生司書」、すなわちスタッフとしてイベントの企画・運営に当たることが多い。青陵で開催されたヒューマンライブラリーでも学生の有志を募り「学生司書プロジェクト」<sup>1</sup>を立ち上げた。新潟青陵大学から臨床心理学科4年生2名、社会福祉学科3年生1名、看護学科1年生1名、新潟大学短期大学部から人間総合学科2年生3名、1年生4名、幼児教育学科2年生1名、そして企画協力校である新潟医療福祉大学から社会福祉学科3年生1名、2年生2名、医療情報学科2年生2名、合計17名の学生が「学生司書」として以下の活動を行った。

### ①「本」の選定とヒューマンライブラリーの趣旨説明・参加依頼

ミーティングを重ねる中、「学生司書」たちがどのような「本」を読みたいか、どのような属性や背景を持つ人に「本」になってもらいたいと話し合いを進めた。企画書、依頼書のもと、教員、学生のネットワークを通してそれら「本」の候補へコンタクトを取り、直接会ってヒューマンライブラリーの趣旨を説明、また「本」としての参加依頼を行った。リスクマネジメントの観点から、原則とし

<sup>1</sup> 2018年度新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金事業として採択

て初めて会う場合は教員が会う、ないしは同席し、すでに教員と面識がある方、「学生司書」の知り合の場合はその学生が説明・依頼を行うことを許可した。

## ②「本」の方へのインタビューのインタビューと「あらすじ」の作成

「あらすじ」とは「本」の紹介文であり、ヒューマンライブラリー当日会場に掲示され、来場者はそれらを参考に興味ある「本」を選択することができる。ヒューマンライブラリーに参加する「本」の方々が決定すると、「学生司書」はそれぞれ個人、ペア、グループに分かれ自分（たち）の担当する「本」を決定、実際に「本」と直接会いインタビューを行い、それをもとに「あらすじ」を作成した。これが「学生司書プロジェクト」の根幹となる課題である。学生は「本」とのインタビューを通して「本」のライフストーリーの中での生きづらさや葛藤、それらを乗り越えた姿、あるいは今もそれらと対峙する姿、考え方や価値観、世界観を聞き取り、それらを学生自身の言葉で再構築して「あらすじ」としてまとめた。また多様性の理解という観点から、それぞれが複数の「本」を担当し、まったく違った属性や価値観に触れ合うことを推奨した。

## ③ヒューマンライブラリー運営

まずヒューマンライブラリー本番を前に「本」と「学生司書」との顔合わせも兼ねた「読書」のリハーサルを行った。学生にとっては自分の担当する「本」以外の「本」の方と会う初めての機会となり、リハーサルでは学生が「読者」役になり実際のヒューマンライブラリーを体験した。またヒューマンライブラリー本番当日は、会場設営に始まり、「本」のアテンダント、受付担当（「同意書」回収、「本」の予約貸出）、会場担当（誘導、「あらすじ」説明）、「読書」教室担当（教室内での誘導、リスクマネジメント）などに分かれ運営にあたった。また、担当業務のない時間帯は「読者」として「読書」にも積極的に参加した。

このように、学生は「司書」として多様な「本」とより親密に接することができる。単純にヒューマンライブラリーのリハーサルや本番でより多くの「読書」を体験できるだけでなく、「あらすじ」作成では、「本」と密にコミュニケーションを取りながら、齟齬のないよう自分たちの言葉で「本」が語るストーリーをリフレーズしたり、「本」の属性を考慮しながら準備・運営を行ったりと、深い次元での理解と関係構築が可能になると考える。なお、この「学生司書プログラム」については、関・岩森他（2019）で詳しく報告している。

## 4、用語の定義

自己教育力とは、自ら学び自己を成長させていく力であるとされ、①成長・発達への志向、②自己の対象化と統制、③学習の技能と基盤、④自信・プライド・安定性4つの側面から構成される。

## 5、研究方法

### 【調査対象】

新潟青陵大学の学生4名、新潟青陵短期大学の学生8名、新潟医療福祉大学の学生5名、合計17名であった。

### 【調査内容】

#### ①自己教育力の測定

自己教育力の測定には梶田が作成した自己教育性測定尺度に10項目追加し、西村らの自己教育力

測定尺度40項目を用いた。選択肢は「はい」1点「いいえ」0点の2件法で測定した。反転項目に関しては、「はい」0点「いいえ」1点とした。

## ②ヒューマンライブラリーの教育効果の測定

ヒューマンライブラリーのプレイベントとして、公開型のヒューマンライブラリー立ち上げ講座に参加した15名の学生に対し、予備調査としてフリーアンサー形式でアンケートを実施した。予備調査結果の解析はKJ法を用い、カテゴリーごとに分類を行った。その結果をもとに5段階評価による質問紙を作成し、本調査としてヒューマンライブラリー実施後に回答してもらった。

### 【研究期間】

ヒューマンライブラリープレイベントが行われた2018年6月とヒューマンライブラリー実施後2018年10月の2時期であった。

### 【分析方法】

統計解析ソフトは、SPSS Statistics 24を用い統計処理を行った。

以下に解析の手順を述べる。

- 1、自己教育力の全項目の平均値および標準偏差を算出した。
- 2、自己教育力の4つの側面について平均値および標準偏差を算出した。
- 3、ヒューマンライブラリーの前後における自己教育力の変化についてt検定による有意差検定を行った。
- 4、ヒューマンライブラリーの教育効果を測定するためのアンケートを作成し、その結果について平均値を算出した。さらにカテゴリーごとの平均値を算出した。
- 5、自己教育力の側面とヒューマンライブラリーに関する調査結果との関係性をPearsonの相関係数を用いて算出した。

### 【研究における倫理上の配慮】

調査対象に、研究の目的、プライバシーの保護、調査への協力の有無により不利益を被ることがないこと、調査結果は研究の目的以外には使用しないことを紙面と口頭にて説明し、同意を得たものには承諾書を提出してもらった。尚、本研究は新潟青陵大学短期大学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。(受付番号 第4号)

## 6、結 果

回収率はヒューマンライブラリー（以下HLと記す）実施の事前、事後の調査共に100%であった。その中から欠損値のあったものを除き、分析対象は16名であった。

### 1) 自己教育力の変化

#### ①自己教育力の各項目の平均値と標準偏差

自己教育力の各項目の平均値と標準偏差についての結果を表1に示した。ヒューマンライブラリー実施前に比べて高い値となった項目は、40項目中19項目であった。各項目のうち上位に位置した項目は「自分の良いところ悪いところがよくわかってる」「ちょっといやなことがあると、すぐ不機嫌になる★」「自分の考えた行動が批判されても腹を立てない」「他の人の話を聞いたり本を読む時、内容を振り返りまとめてみる習慣がある」「生まれ変わるとしたなら、やはり今の自分に生まれてほしい」であった。尚、全ての項目において有意な差は認められなかった。

表 1. 自己教育力の各項目の平均値及び標準偏差

自己教育力の側面	項目	事前		事後	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
成長・発達への志向	I-1 自分がやりはじめたことは、最後までやり遂げたい	0.94	0.24	0.88	0.33
	I-2 たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい	0.94	0.24	1.00	0.00
	I-3 これからもよい仕事をし、多くの人に認められたい	0.94	0.24	1.00	0.00
	I-4 自分の能力を最大限にのばすよう、いろいろ努力したい	1.00	0.00	1.00	0.00
	I-5 自分でなければやれないことをやってみたい	0.94	0.24	0.88	0.33
	I-6 将来、他の人から尊敬される人間になりたい	0.88	0.33	0.81	0.39
	I-7 一体なんのために勉強するのだろうか、といやになることがある★	0.63	0.48	0.44	0.50
	I-8 ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い★	0.81	0.39	0.38	0.48
	I-9 これからの専門的な資格や学位など取りたい	0.94	0.24	0.94	0.24
	I-10 人の人生は結局偶然のことで決まると思う★	0.31	0.46	0.44	0.50
自己の対象化と統制	II-1 他の人から欠点を指摘されると、自分でも考えてみようとする	0.81	0.39	0.88	0.33
	II-2 疲れているときには、何もしたくない★	0.94	0.24	0.13	0.33
	II-3 腹がたってもひどいことを言ったりしないように注意している	0.69	0.46	0.81	0.39
	II-4 自分のよくないところを自分で考え直すように注意している	0.94	0.24	0.94	0.24
	II-5 いやになった時でも、もうちょっとだけ、もうちょっとだけと頑張ろうとする	0.75	0.43	0.81	0.39
	II-6 自分の良いところ悪いところがよくわかってる	0.50	0.50	0.69	0.46
	II-7 できるだけ自分をおさえて、他の人と合うわせようとしている	0.69	0.46	0.69	0.46
	II-8 テレビを見てしまっ、勉強がやれないことが多い★	0.38	0.48	0.25	0.43
	II-9 ちょっといやなことがあると、すぐ不機嫌になる★	0.50	0.50	0.69	0.46
	II-10 自分の考えた行動が批判されても腹を立てない	0.31	0.46	0.50	0.50
学習の技能と基盤	III-1 わからないことがあると、すぐに人に聞く傾向がある	0.69	0.46	0.63	0.48
	III-2 考えを深めたり、ひろげたりするのに話し合いや検討をすることを大切にしている	1.00	0.00	1.00	0.00
	III-3 自己評価する時には、自分の目標にたどり着いている	0.75	0.43	0.56	0.50
	III-4 たとえ話などをもちいて人にわかりやすく、説明することが苦手である★	0.31	0.46	0.19	0.39
	III-5 自分の調べたいことについて文献検索していくことができる	0.63	0.48	0.63	0.48
	III-6 とりくみたいことによって、それにあった学習方法や手続きを調べる	0.88	0.33	0.75	0.43
	III-7 他の人の話を聞いたり本を読む時、内容を振り返りまとめてみる習慣がある	0.19	0.39	0.38	0.48
	III-8 考えていることを筋道たて書いたり、伝えたりできる	0.44	0.50	0.31	0.46
	III-9 自分の調べたいことがある時に図書館（室）を利用している	0.50	0.50	0.56	0.50
	III-10 自分に必要な文献や記録を分類・整理しておく習慣がある	0.38	0.48	0.44	0.50
自信・プライド・安定性	IV-1 今のままの自分でいけないと思うことがある★	0.13	0.33	0.13	0.33
	IV-2 ときどき、自分自身がいやになることがある★	0.13	0.33	0.19	0.39
	IV-3 自分のことを恥ずかしいと思うことがある★	0.31	0.46	0.38	0.48
	IV-4 自分にもいろいろとリエがあると思う	0.75	0.43	0.81	0.39
	IV-5 今の自分が幸福だと思う	0.75	0.43	0.81	0.39
	IV-6 他の人にばかにされるのは、がまんできない	0.56	0.50	0.63	0.48
	IV-7 自分のやることに自信を持っている方だと思う	0.44	0.50	0.38	0.48
	IV-8 生まれ変わるとしたなら、やはり今の自分に生まれたい	0.25	0.43	0.44	0.50
	IV-9 何をやってもだめだと思う★	0.81	0.39	0.81	0.39
	IV-10 今の自分に満足している	0.38	0.48	0.56	0.50
合計		25.06	0.13	24.69	0.15

★は反転項目を示す

## ②自己教育力の4つの側面の平均値と標準偏差

自己教育力の4つの側面について平均値および標準偏差を表2に示した。

自己教育力の4つの側面別平均値を事前事後で比較したところ、自信・プライド・安定性の項目においてわずかに上昇傾向がみられたが、有意な差は認められなかった。

## 2) HLの教育効果を測定するためのアンケート調査

### ①アンケート項目作成のための予備調査結果

予備調査として行ったフリーアンサーによるアンケート調査結果をKJ法によりカテゴリーに分類したものを表3に示した。大カテゴリーとしては、「自己の内面の変化」に関する記述と「企画に対する評価」に関する記述の2つに分類された。また「自己の内面の変化」は「多様性の理解」「共感性」「今後の姿勢」の3つのカテゴリーに分類された。これら3つの小カテゴリーのうち最も



表2. HL実施前後の自己教育力の4つの側面別得点の変化

	事前	標準偏差	事後	標準偏差
成長・発達への志向	8.31	0.20	7.75	0.23
自己の対象化と統制	6.50	0.21	6.38	0.25
学習の技能と基盤	5.75	0.24	5.44	0.22
自信・プライド・安定性	4.50	0.24	5.13	0.24

表3. KJ法による回答のカテゴリー分類

大カテゴリー	小カテゴリー	回答数	反応例
自己の内面の変化	多様性の理解	18	自分の中にある偏見に気付いた 無意識に偏見をもっていた 日常生活の中にマイノリティの方はたくさんいる
	共感性	5	今まで辛い思いをしてきたのかな 自分との共通点を見出せた 普段の生活では知ることのできない気持ちを知った
	今後の姿勢	10	助けが必要な人に自分から自然と手を差し伸べたい 自分の中で考えることが大切だ 本の方を知るためにもっと関わりを持ちたい
企画に対する評価	不安・緊張	14	経験するまでは暗くて大変そうなイメージをもっていた 最初は緊張していた これを聞いたら嫌な気持ちになるのかなという不安
	興味・期待	27	もっと話を聞きたいと思った 関心が深まった 次回が楽しみだ
	対話に対する感想	26	本の方が前向きだった 逆境を強みに変える強さ 自分らしく生きている姿
	貴重性	20	貴重な経験であった とても新鮮であった 普段の生活では聞くことのできない話
	公開型HLに対する意見	27	講演会に比べて質問しやすい より深い話ができる 講演会よりも堅苦しさがない

回答数が多かったのは「多様性の理解」に関する記述であった。「企画に対する評価」では、「不安・緊張」「興味・期待」「対話に対する感想」「貴重性」「公開型HLに対する意見」に分類された。これら5つの小カテゴリーのうち最も回答数が多かったのは、「興味・期待」と「公開型HLに対する意見」であった。

## ②アンケート項目の作成

予備調査で得られた結果を参考にアンケート項目を作成した。アンケート項目の作成においては、予備調査結果の大カテゴリー「自己の内面の変化」に関する記述を参考に、小カテゴリーに関連する質問を各3つずつ、合計9つの質問を作成したものを表4に示した。またその質問用紙を表5に示した。

## ③HLに関するアンケート調査結果

HLに関するアンケート調査結果を図1に示した。最も高かった項目は「多様な人と関わっていききたいと思う」5.0の項目であり、続いて「世の中には自分と違う多様な人がいることが分かった」4.94

表4. 予備調査結果をもとにした質問項目

多様性の理解	①世の中には自分とは違う多様な人がいることが分かった。 ②自分がいかに偏見や固定観念をもっていたかに気付いた。 ③一人一人に違った考えや思いがある。
共感性	④自分だったらと考えた。 ⑤その人の立場になって思いを巡らせた。 ⑥自分の経験や感情との共通点を見出せた。
行動の変容	⑦色々な立場の人のことを知りたい。 ⑧多様な人と関わっていききたいと思う ⑨もっと多様な背景をもった人が理解される場をつくりたい。

表5. HLに関するアンケート評価用紙

## ヒューマンライブラリーに関する調査

本調査は、学生の皆さんのヒューマンライブラリーに関する意識や要望を把握し、今後のヒューマンライブラリーのあり方について検討する資料として使用するものです。アンケートの回答内容は成績評価等には一切関係しません。是非率直な意見を聞かせてください。

アンケート調査担当 岩森

1、ヒューマンライブラリーに参加して感じたことを、下記に示した5段階評価に基づいて記入してください。

評価	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: space-between; width: 100%;"> <span>←</span> <span>→</span> </div>				
	1	2	3	4	5
	全く思わない	あまり思わない	どちらともいえない	ややそう思う	非常にそう思う

【記入例】

よい例  
○

悪い例  
×

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

①世の中には自分とは違う多様な人がいることが分かった。

②自分がいかに偏見や固定観念をもっていたかに気付いた。

③一人一人に違った考えや思いがある。

④自分だったらと考えた。

⑤その人の立場になって思いを巡らせた。

⑥自分の経験や感情との共通点を見出せた。

⑦色んな立場の人のことを知りたい。

⑧多様な人と関わっていきたいと思う

⑨もっと多様な背景をもった人が理解される場をつくりたい。

1

2

3

4

5

2、ヒューマンライブラリーを通して学んだことについて自由に述べてください。

大学名

氏名

図1. HLに関するアンケート調査結果

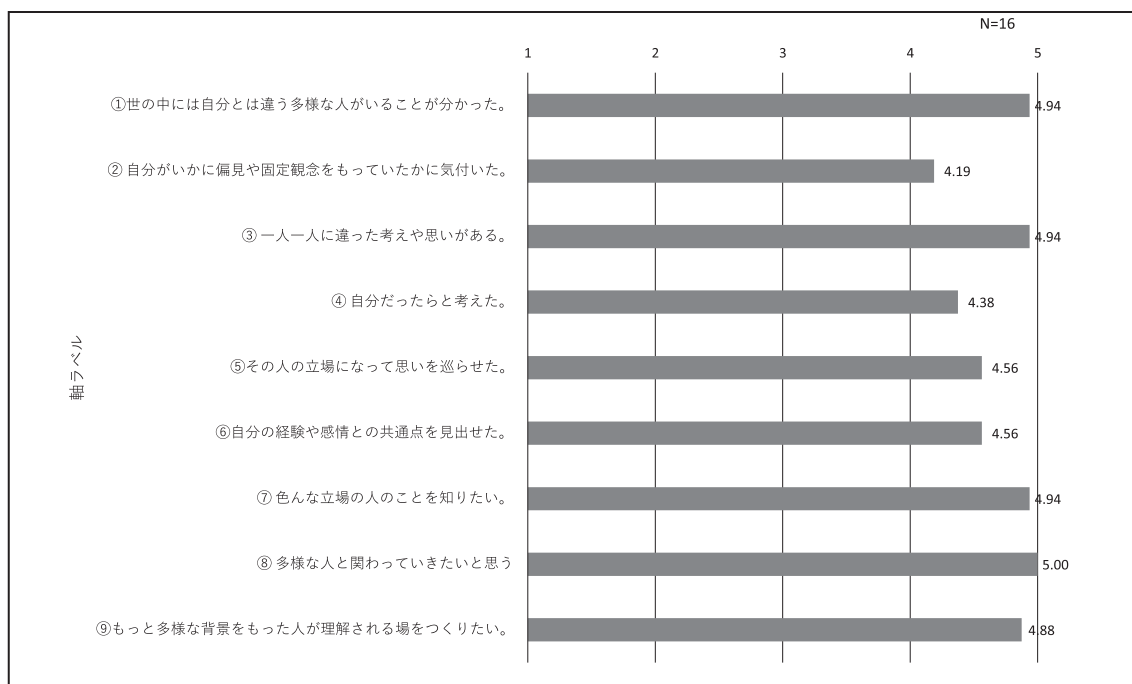


表6. HLに関するアンケート調査結果のカテゴリー別得点

	多様性の理解	共感性	行動の変容
平均	4.69	4.50	4.94
標準偏差	0.22	0.42	0.13

「1人一人に違った考えや思いがある」4.94「色々な立場の人のことを知りたい」4.94であった。項目間に有意な差は認められなかった。

#### ④HLに関するアンケート調査結果のカテゴリー別得点の平均値と標準偏差

HLに関するアンケート調査結果のカテゴリー別得点の平均値と標準偏差を表6に示した。行動の変容＞多様性の理解＞共感性の順番で、高い値を示しており、いずれも4.5を上回っていた。項目間に有意な差は認められなかった。

### 3) ヒューマンライブラリーに関する調査結果と自己教育力の側面「自信・プライド・安定性」との関係性

HLに関するアンケート結果のカテゴリー別結果と自己教育力の1側面「自信・プライド・安定性」の下位項目との関連性を表7に示した。多様性の理解と「ときどき自分自身がいやになるときがある」(反転項目)のPearsonの相関係数は-0.532であり、と負の相関がみられた。行動の変容と「今の自分に満足している」の相関係数は0.545でありと正の相関がみられた。



## 7、考 察

今回HLの運営に学生司書として関わった学生の内的成長を表す指標として、自己教育力の測定を用いた。本研究では、HLの前後において有意な差は見られなかった。有意な差が得られなかった要因の1つとして尺度として「はい」「いいえ」の2件法を用いたことが考えられる。2件法は被験者負担が少なく、比較的多数の項目でも実施可能であり、答えやすい利点があるが、尺度間の差が大きく、迷いを生じるような問題である場合、回答しにくい傾向がある。今後は尺度を5段階にするなど算術平均を算出しやすい尺度の選定も今後検討していく。またHLの運営に関わる学生の人数は少数である。本研究の調査対象者は計16人であり、量的研究として、客観性のある結果を論じる難しさがあった。しかしながら、有意ではないものの、事後に自己教育力の4つの側面の1側面である「自信・プライド・安定性」が上昇する方向にあることが窺えた。梶田は、「自信・プライド・安定性」の側面は他の3つの側面を支えるものであり、自信をもっているかどうか、プライドをもっているかどうかを決定されるといっても過言ではない」と述べている。今後この取り組みを継続する中で、「成長・発達への志向」「自己の対象化と統制」「学習の技能と基盤」の3つの側面に関しても今後徐々に伸びていく可能性が示唆される。

HLの教育効果を測定するためのアンケート調査では、まず予備調査として行ったフリーアンサーによる記述をKJ法によりカテゴリーに分類した。この結果から、HLのもつ様々な要素が概括的に整理できたのではないかと考えられる。この分類をもとに作成した調査結果では、すべての項目において4.5

表7. HLアンケート結果のカテゴリー別結果と自己教育力の1側面「自信・プライド・安定性」の下位項目との関連

		IV-1今のままの自分 で1けないと思 うことがある★	IV-2ときどき、自 分自身がいやにな るときがある★	IV-3自分のことを 恥ずかしいと思う ことがある★	IV-4自分にもいろ いろと見えがある と思う	IV-5今の自分が幸 福だと思う
多様性の理解	Pearson の 相関係数	-0.323	-0.532*	-0.270	-0.198	0.289
	有意確率 (両側)	0.223	0.034	0.313	0.463	0.278
共感性	Pearson の 相関係数	0.148	0.063	-0.405	-0.188	0.063
	有意確率 (両側)	0.584	0.817	0.120	0.485	0.817
行動の変容	Pearson の 相関係数	0.182	0.231	0.041	-0.231	0.179
	有意確率 (両側)	0.501	0.390	0.879	0.390	0.506
		IV-6他の人にばか にされるのは、が まんできない	IV-7自分のやるこ とに自信を持っ ている方だと思う	IV-8生まれ変わる としたなら、やは り今の自分に生ま れたい	IV-9何をやっても だめだと思う★	IV-10今の自分に 満足している
多様性の理解	Pearson の 相関係数	-0.319	-0.270	-0.084	0.289	0.084
	有意確率 (両側)	0.229	0.313	0.758	0.278	0.758
共感性	Pearson の 相関係数	-0.405	0.101	-0.049	0.063	-0.148
	有意確率 (両側)	0.120	0.709	0.856	0.817	0.584
行動の変容	Pearson の 相関係数	-0.041	0.041	0.101	0.179	.545*
	有意確率 (両側)	0.879	0.879	0.710	0.506	0.029

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)。

★は反転項目を示す。

を上回っており、教育効果は概ね良好であったと考えられる。しかしながら、項目間に有意な差は見られなかった。全ての回答が5段階評価のうち5に偏ってしまった結果から、今後は反転項目をつくるなど項目の見直しが必要である。

自己教育力の4つの側面のうち、有意差はみられないものの僅かながら変化がみられた「自信・プライド・安定性」とヒューマンライブラリーに関する調査結果との関係性では2つの項目間に有意な相関が見られた。多様性の理解と「ときどき自分自身がいやになるときがある」（反転項目）のペア、行動の変容と「今の自分に満足している」の2つのペアに相関が見られたことは、HLの実施により自分自身を肯定的にとらえることにつながったと捉えられる。

HLに学生司書として関わった学生は、「本」である人との接触過程の中で、本を理解し共感性を高め、語ってくれることへの感謝の念をもつ。また一方でHLという企画の貴重性に気づき、成功を願い、綿密な準備を進める。その過程はアクティブラーニングであり、多面的な成長を遂げるものであると考える。本研究はその第一歩として、HLに学生司書として関わった学生の客観的評価法の確立の土台作りに着手できたのではないかと考える。

今後の展開としてはフリーアンサーによる調査結果をテキストマイニングを用いて解析するなど、対象者が少数でありながらも、客観性を担保しながら学生の内面的変化を探る方法について模索していきたい。

## 8、附 記

本研究は2018年度新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金（課題名：ヒューマンライブラリー学生司書プロジェクト）の助成により実施した。

### 【引用・参考文献】

- 1) 加賀美常美代・横田雅弘他編著「多文化社会の偏見・差別：形成のメカニズムと低減のための教育」明石書店、2012、150-195
- 2) 梶田叡一：自己教育への教育、明治図書、1985
- 3) 坪井健「ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力—コンピテンシーを育てる実践の立場から」異文化間教育、45、2017. 3、65-77
- 4) 関 久美子、岩森 三千代、池宮 真由美、佐藤 裕紀：ヒューマンライブラリーの実践と学生への教育効果—多様性の理解を目指す試みとして—、新潟青陵大学短期大学部研究報告第49号、2019. 3、25-41項。
- 5) 梅橋操子、多久島寛孝、三村孝俊：基礎実習前後における自己教育力の変化、保健科学研究誌、1、105-112（2004）
- 6) 今村圭子、山口さおり、中俣直美他：基礎看護技術を学習する看護学生の自己教育力に影響する要因の分析、鹿児島大学医学部保健学科紀要、28、1、31-39（2018）
- 7) 沼口郁子、岡田正美、加藤和子、他：看護学生の自己教育力と学習への動機づけとの関連、愛知県立総合看護専門学校紀要；2017：11：12-20